

# 音楽を生きることを伝えたい

## 井上 郷子 先生

(いのうえ さとこ)



神戸市生まれ。県立神戸高校から東京学芸大学、同大学院作曲科修了。「ムジカ・プラクティカ・アンサンブル」のメンバーを経て、1991年よりソロ活動を始める。“Satoko Plays Japan”をはじめとする多くのリサイタルを行ない、特に、近藤譲ピアノ作品・全曲演奏やモートン・フェルドマン作品の演奏等で高い評価を受ける。海外では、ISCM（ルーマニア）、プエノスアイレス現代音楽週間などの国際現代音楽祭からの招聘をはじめ、ヨーロッパ、南北アメリカ、中東各地でソロリサイタルを行なうとともに、リール大学、カイロ音楽院、カリフォルニア芸術大学などのマスタークラスで講師を務める。2008年よりコンサート・シリーズ“Music Documents”（東京）を年3回企画・制作、「第1回両国アートフェスティバル2015」芸術監督も務める。ソロCDアルバムとして、これまでにHatHut Records（スイス）等より計6タイトルが出版されている。第10回佐治敏三賞（サントリー芸術財団）受賞。現在、国立音楽大学教授。

近藤譲をはじめ、世界中の現代作曲家の感性を刺激するピアノスト、井上郷子先生。先生が語る「音楽家としての矜持」とは？常に穏やかな先生とお見かけしていたのですが、インタビュアーでは、あふれるように音楽や仲間への想いを話しいただきました。

### 神戸が育んだ感性

#### —ピアノと石川啄木と

—神戸のご出身と伺いました。

**井上** 生まれたのは灘区で、東灘区と灘区で育ちました。私が子どもの頃はまだまだそんなに開発されていなかったもので、本当の山と海に囲まれていました。太陽が動くにつれて山の色が変わっていく…見ていて飽きなかったですね。海も、何か嫌なことがあつたら高台に登って見ていると、シームレスにこことは違う世界に繋がっているという感覚があつて。「私はここにいないでもどこでも行ける」と常に思っていました。

—ピアノを始めたのはいつ頃ですか？

**井上** 姉について行って、三歳半の時に始めました。先生は幼稚園の先生の娘さんだったので、すぐに自分の先生のところに移ったほうがいいと言われて、中学が終わるまではそのこで。

実は、幼稚園の園長先生の奥様が石川啄木の妹さんだったそうなのですが、買ったか、いただいたか、家に詩や短歌の本が多かった。小学校ぐらいの時から読んで、啄木ってものすごいロマンティストだな、というイメージで、けれど、学校へ行って習うと、停車場がどうか、お母さん背負ってとか、何か惨めつたらしい啄木像しか出てこない。「ええー、これが載るんかい！」と。（笑）

—幼少期から詩に親しまれて。

**井上** そうですね。そんなに活発に動き回ると言うタイプではなかったから、空想に耽るとか、本はよく読んでいました。

### 新しい音の世界の発見

—いつ頃からピアノを本格的に学ぼうと？

**井上** 中学が終わるまで習っていた先生は、いわゆるバッハ、ベートーヴェンの王道を行っていました。自分が小学生の頃好きだったのはバッハとシューベルトでした。バッハは小さい二ページの曲に宇宙があるみたいな感じがして。それから、この音じゃない音があつたらどうなるのだろうか、どう聴こえるのだろうかとか、試したり考えたりはしていました。インヴェンションで、上下入れ替え

て弾いてみるとか、家でこっそりやっていましたね。

シューベルトは、自分の心と話しているみたいな、音楽がそばにいてくれる感じが好きでした。

そんなある時、教育テレビのピアノのお稽古でフランスの近代音楽をやっていて。私も弾いてみたかなと思って、ドビュッシーの《ベルガマスク組曲》の楽譜を買ったのです。家に帰って《月の光》の最初の一打を弾いた時、あれは驚きました、本当に。目からうろこが落ちました。ああ、こんなに美しいものがあつたのだ、という、新しい音の世界の発見です。響きの美しさを体験してみたいというのは、現代音楽をやっている原点だったかもしれません。

―響きに強く惹かれていった。

**井上** そうですね。中学生の時、合唱部で伴奏をしていましたが、日本人の作曲家のものをやったりもするので、その人がピアノだとどういう曲を書いているかなと探して。そうすると合唱曲とはまた違った響きがある。いわゆる生きている人の作っている音楽に、ピアノ曲として出会っているのはその頃です。

三年生の時にはクラスメートと、隠れピートルズ部みたいななの

もやっていて(笑)。その中の一人が山ほどレコードを持っていて。ロックとか、突然大きな声でガーンとするでしょ。あれも驚きだったし、変な歌詞が付いたりするのでも面白いなと思って、自分でナンセンスな言葉を並べて曲を作って遊んでいました。

ただ、音楽はもちろん大好きなのですが、周りに専門家がいなかったので、プロの音楽家として生きるのか、イメージとしてなかつたのですね。高校に上がった頃は、ゾロアスター教の研究が出来る大学に行きたいと思っていて。

―ゾロアスター教の？

**井上** 壁画とか、宗教画みたいなのをたくさん見る機会があつて、そうすると「東方」というのがよく出てくる。東方って一体何だろうと辞書で調べたり、本を読んだりしていたら、何か途方もない豊かな世界があるなと思つたの。その広がりの中でゾロアスター教を知って、興味を持つたのです。

この子に作曲の勉強をさせなさい

―作曲の勉強はいつから？

**井上** 高校生になって、よく休み時間に音楽室でピアノを弾いていたのですが、音楽の先生が来て、

「音楽のほうに行きたいのだから早く言ってくれ」とか何度か言われて。そのうち「お母さん連れてこい」と。それで先生が母に「この子に専門的な、特に作曲の勉強をさせなさい」と言つて、その場で作曲の先生に電話して。私は「まだ決めてないし、作曲って何を勉強していいかわからないので」と言つたら、「そんなの今からやるんだ。とにかくその先生の所へ行け」と。

結局、その先生のところへ行つたら「大学は東京に行つて勉強しなさい。だけど今は、自分よりもっと若い先生に習つたほうがいいから」と、ポーランドの留学から帰られた若い先生に、先生がまた電話をしたのです。

それで始めてみたら、ものすごく面白いのですよ、作曲の勉強というのは。今までバッハをやつていて分からなかつたことや、ドビュッシーを弾いて、どうしたらこういう響きが出るのかとか、そういう疑問がだんだん解けていくし。それでも、音楽家として生きていくことを決心しました。

ピアノは、作曲の先生が紹介してくださつたジュリアード音楽院を出られた方につきました。レッスンの時には、ただ曲を弾くだけ

でなく、ピアノリストから見た楽曲分析をしてくださつたりして、多くのことをこの時期に学びました。

―出会いが会いを撃いでいったという。

**井上** そうですね。本当にあの頃の先生方には感謝しています。

音楽を生きる

―甲斐説宗先生との出会い  
大学は学芸大に進学されて、どんな出会いが？

**井上** 私の作曲の先生となつたのは、甲斐説宗さんという作曲家でした(※)。私が二年生の十月に亡くなられて。先生には一年ちょっとしか見ていただけなかつたけれど、物を創る人というのはこういうふうに見えるのだというのを、強烈に教わりました。矜持というか、誇り。ぶきつちよでも、毎日毎日少しずつ創る。これこそが甲斐説宗というものを創り出している。先生が音楽をどう生きているかということですね。

―音楽を生きる…

**井上** 私は音楽と生きるとか、音楽に生きるとかじゃなくて、「音楽を生きる」といつも思っているのですが、それは甲斐先生から得たものです。だから、甲斐先生に恥ずかしくないように音楽をしよう、いつも思っています。全然

アグレッシブではない、物静かな、『僕はねえ…、植木にこう、ハサミをぼっちゃん…、ぼっちゃん…、ぼっちゃん…と、そういう曲なのだけだ』みたいな、そんな感じの人でした。

また当時、近藤譲さん<sup>(※2)</sup>も非常勤講師でいらしていました。学外で知り合った若い作曲家何人かでゼミのような勉強会をやろうと、近藤さんのところへ通って。音楽をどう聴くか、どう見るか、問題意識をどう持つか、思想性というのはどういことだとか、音楽を実際にやっていくのに必要な核となるようなものは近藤さんからたくさん教わりました。

### 作曲の道からピアニストへ

―作曲家からソロのピアニストになる転機はありましたか？

井上 大学の時には、もうマイミュージックというのは現代音楽だったので、何かの形でそれには携わるだろうというのが前提としてあるわけです。大学院も作曲科に行ったのですが、作曲家たちの作品展でも演奏したりしていました。それと「ムジカ・プラクティカ・アンサンブル」<sup>(※3)</sup>でピアニストを務めていたことも大きい。この室内オーケストラで多くの現代作品に

取り組み、ここで得た経験をもとにソロ活動を始めました。

習っていたピアノの先生も素晴らしいから、その影響もあつたと思う。今、東京音大で教えていらつしやる岡田敦子さんに習っていて、先生には自分が思っている一つ一つの音をどういふふうに変実化していくかというメカニカルなこと、その道筋というものを学びたかった。現代曲を弾く時は、譜読みと解釈を自分なりにやって日本人のものだったら、その作曲家の所へ行つて聴いてもらうことも。それから岡田さんにピアノ的に分からないことのアドバイスをいただいたりしました。

私にとって大事な作曲家となるようなジョン・ケージとかモートン・フェルドマンに出会って、たつた一つの音を持つ佇まいであるとか、響きの魅力、ほんの少し繊細に変化するだけで変わる音楽的な時間、音楽をよく聴くことによつて視界が開けていくこと、そういうことを聴衆として体験したのも二十代前半です。

### 「誤読」の質がいかどうか

―作曲家ご本人に演奏を聴いていただきたいり、アドバイスをいただいたりする時の雰囲気は？

井上 絶対にこれでなくちゃいけないという方も多分いらつしやると思う。それから、基本的にはこのうなだけけれども、自分が思っていないことが出てきて、それを面白いと思つてくださる方もいる。そういうやり取りというか。

私の経験として、解釈のピントが外れていたことは、今まではないですね。現代音楽のたくさんの方を学んで、常に問題意識を持つて取り組んでいるので、どのような美学をもつて書かれた作品かは、ある程度譜面を見たら分かる。それで自分なりに解釈しているのかな。

―音を現実化していく中で、作品が変わっていく？

―面白い過程ですね。

井上 ありますよ。それに、例えばですけど、ショパンの曲を弾く時に、私はショパンじゃないから、ショパンの考えそのもの、一〇〇%イコールってあり得ない。二十一世紀になつて、人間の生きるスピードも違えば、世の中全体の雰囲気もあれば、流行もある。変わっていくというよりは、結局誤読をしていく上で、誤読の歴史が積み重なつていく、その質がいかどうかなんです。音楽をちゃんと書いている人は、そういう可能性もあると思つていくことができるのでは？

―誤読の可能性？

―図形楽譜も？

井上 誤読をされたことで、自分が書いたものではないものが出てくるかもしれないけれど、それも音楽である、音楽たり得るといふか、音楽の持つている豊かさみたいなもの。だから、誤読の質だと思ふ。

井上 でも、実際弾くのが大変なので。譜読みも大変だし、難しいね。だから、若い頃の何年間かは死ぬ思いでやつて良かったな。

―譜読みのコツは？

井上 今、作曲とコンピュータ音楽の学生を見ているので、現代曲もやらせるのですけれど、どういふ音が使われているか、構成がどうなっているかを、作曲家がどう書いたかという面から解釈するように譜読みをするとしやすいよと言つています。

―図形楽譜も？

井上 図形楽譜の場合は、その図形に合った読み取り方があつて、何で図形になつていふのかというところが大事。図形を読み取りましようという、表面的なものではなくて、何でそうなつていふかということが大事だと思ふ。音楽のコンセプトを読み取つていかな

## PARLANDO INTERVIEW

いと、「よう分からんけど、なんか面白い」だけになつちやうから、それは良くないと思います。

### 物事は徹底したところでないと生まれたい

―学生たちと接して感じることとは？

井上 一番は、言葉が情報になつているといふか、コード化されていること。例えば「恋愛」と言ったら、彼らの頭の中には「恋愛Ⅱこれ」がコードとしてある。でも、ちよつとずらしたことを言つたら分からない。自分のイコールがちよつとしかないから、その部分でしか考えられない。演奏にしても、作曲にしても、作つていく人間にとっては、その状態というのは豊かではないです。

―自分の知り得る範囲の閉じた世界で生きていく？

井上 そう、閉じちゃう。想像することの裏にまた想像することがあつてという、複数次元の話がなく、とても単次元。そうじゃない子もいますけど。あとは何か疑問に思うこと、問いかけること、それをいつも持つていないと。権威や権力のあるものをそのまま受け入れることになるし、紋切り型のもので満足してしまう。

―学生たちに何かメッセージを。

井上 時間をかけなきやダメですね。音楽はこれだけ深くて広い世界ですから、自分は音楽の隅っこにちよつといるぐらいの存在でしかない。

これは私の信条なのですけれど、やはり物事は徹底したところでないと生まれたいと思つているので、そこまでやるということではないので、そこまでするか。人生は短いから、たくさんのことは出来ないけれど、ちゃんとやることで初めて大事なものが生まれるのではないかと。目先のことは気になるだろうけれど、学生さんには理想を持つてやつていただきたいなと思つてますね。それこそ音楽をやる者の矜持みたいなものを持つてほしい。

それから、自分はやるほうには向いていないけれども支える仕事をするとか、いい聴衆になることだつて素晴らしいこと。だけど何か、音楽をやつてきたことの誇りが失われていかないようになつてほしいなと思います。

リュック・フェラーリにしても、フェルドマンも、近藤さんも、ケージもそうだけれど、本当に徹底してやつた人だし、そういう作曲家、演奏家に惹かれますね。

だから、音楽を生きていくことを何か少しでも伝えることが出来

たらいいなと思つていますし、そうできれば本当に幸せなことだと思つた。

―今後の予定を。

井上 両国門天ホール<sup>(※4)</sup>で「ミュージック・ドキュメンツ」というコンサートシリーズを企画してやっています。それから、オペラシティのリサイタル。十一月にドイツとスイスで、モートン・フェルドマンを弾くコンサートと二十一世紀以降の日本のピアノ音楽のコンサートがあります。

### 井上先生おすすすめの資料

#### 図書

◆「緑の音楽」近藤譲著 アルテスパブリッシング 2014 請求記号・J126-839

日本を代表する作曲家、近藤譲が1970年代に著した書。1970年代までの音楽についての深くかつ明快な考察と彼独自の音楽論は、私たちが現代の音楽を考えるうえで、大きな示唆を与えてくれる。以前朝日出版社から出版されていたものが、近年復刊。

◆「サイレンス」ジョン・ケージ著 布沼敏江訳 水声社 1996 請求記号・CG0-846

ジョン・ケージの音楽観が彼独特の言葉で語られていて、ケージ・ワールドが垣間見える数少ないもののひとつ。

◆「人間の条件」ハンナ・アーレント著 志

水速雄訳 ちくま学芸文庫 1994 発注中

◆「活動的生涯」ハンナ・アーレント著 森一郎訳 みほ書房 2015 発注中

政治学や哲学の分野で優れた著作を残したハンナ・アーレント。複雑化し大規模化した社会のなかで、私たちはいかにして人間の自由や幸福を確保するのか、という問いと思考は、約半世紀前に書かれたにもかかわらず色あせてはいない。前者は英語からの既訳、後者は彼女の母語であるドイツ語からの新訳。

◆「雪」(新訳版) オルハン・パムク著 宮下遼訳 早川epi文庫 2012 発注中

オルハン・パムクはトルコを代表する作家。エジプトのナギブ・マフフーズもそうだが、中東の作家の文学作品もなかなか興味深い。「雪」では、主人公の詩人Kaが雪の降り続く地方都市カルスに閉じ込められた数日間が語られる。

#### CD

◆「バータ・マカスのために」モートン・フェルドマン作曲 ジョアン・井上郷子ALMUTレーベル ALCDB8 2013 請求記号・XD69033

演奏時間1時間を超えるフェルドマンの大作。1つの音が変化するだけで新たな音楽的時間と空間が紡ぎだされる、その世界は魅力的。

※注1 甲斐説宗 1938-1978 作曲家

※注2 近藤譲 1947- 作曲家

※注3 1980年に結成された室内オーケストラ。武田学長もメンバーの一人として活躍された

※注4 8月には先生が芸術監督を務める「第1回 両国アートフェスティバル」が開催された

●のざき しおり はじめてインタビューを担当しました。音楽をやってきた者の誇り…先生のお言葉が心に響きました。